マルクス恐慌論に関するテーゼⅢに代えて

(1)マルクス経済学の見地から見れば、「経済の金融化」は、1970 年代以降に顕著となった、貨幣資本の過剰蓄積によって引き起こされた、資本主義の蓄積様式の歴史的変化（金融主導型蓄積様式、金融・独占資本主義、マネーマネジャー資本主義、カジノ資本主義、ファンド資本主義、株主価値重視のコーポレートガバナンス、金融グローバル化、その他）を意味している。したがって、金融化に着目して現代資本主義をトータルに考察することを試みる金融化論は、金融経済学ではなく、政治経済学でなければならない。

(2)貨幣資本の過剰蓄積は、景気循環の特定の局面で現れる貨幣資本の過多ではなく、1970 年代の資本主義の危機として発現した、現実資本の過剰蓄積を背景とする現代資本主義の構造的矛盾の現れである。したがって、これが促した「経済の金融化」は、単に金融市場と金融産業に限定された「金融」問題ではなく、現実資本の蓄積様式、政府財政の運営、家計の経済行動、国際経済、さらには、政治・イデオロギー分野にも深くかかわる問題である（新自由主義とファイナンス論の優勢、日常生活の金融化）。金融化論が、経済学だけではなく、社会学、経営学、政治学など社会科学の多くの分野に無視できない影響を及ぼしている事情、金融化論が、カジノ資本主義論やファンド資本主義論と比較して、はるかに広角的な射程で議論されている理由も、金融化の問題領域の広さによって説明できる。

(3)G----G'の形態で価値増殖する貨幣資本の運動は、その性質上、現実資本の価値増殖から自立的に展開する大きな余地をもっており、資本主義の全歴史を通じて、現実資本の過剰蓄積に直接起因しない貨幣資本の過剰蓄積/金融パニックがしばしば発生した。こうした恐慌の歴史は、信用制度が、資本主義の産業循環および恐慌として現れる資本の再生産の制限や矛盾を内的に吸収する弾力的な装置として機能してきたことを表している。信用制度のこの役割は、単に産業資本の資本過不足の調整だけではなく、一つには商業資本の自立的運動を支えることを通じて、もう一つには現実資本から遊離した投機市場を作り出すことを通じて発揮されてきた。さらに現代では、政府の財政機能と結び付いて作用している。

(4) 現代資本主義の金融化が示しているのは、上記のような意味での貨幣資本の自立的運動（投機をふくむ）の余地が、新しい架空資本市場とデリバティブ市場の膨張、銀行制度を上回るシャドーバンキングの発展、ファイナンス論と金融工学の発展（金融革新）、機関投資家の成長、金融自由化・グローバル化、グローバルな M&A 市場の活況、予見可能な金融緩和政策（中央銀行プット）他によって、歴史的に前例のない規模に拡張され、その形態が多様化している事実である。これが、今回の金融恐慌に、歴史的特異性を与えている直接的な要因である。

(5)したがって、現代資本主義の蓄積様式の特質と現代の恐慌の特徴を分析するためには、

過剰な貨幣資本に独自の価値増殖の余地を提供する金融システムの構造と役割を具体的に分析し、それを理論化することが必要である。この作業には、従来のマルクス信用論・恐慌論が十分射程に取り込んでこなかった金融市場と金融産業の最新の状況（架空資本市場、デリバティブ市場、シャドーバンキング他）、金融化に伴う産業企業や商業企業の財務活動と経営戦略の変化（投資から財務へ、拡大再生産から M&A へ）など、現代資本主義の資本蓄積を特徴づける歴史的要因を具体的に分析することが必要である。

(6)マルクス経済学は、教科書的「金融論」に還元されない信用制度論、および、景気循環論に還元されない恐慌論、さらに何よりも資本主義自体を歴史的に規定された相対的な経済体制として把握する歴史的観点を共有することによって、現代資本主義をトータルに分析し、その歴史規定性を解明する理論的優位性を備えている。しかし、総じて言えば、恐慌を周期的過剰生産恐慌として捉える伝統的な恐慌論、銀行信用を基本にして信用の役割を捉える信用制度論にとらわれて、現代資本主義における金融恐慌の独自の重要性、資本市場（架空資本市場）の目覚ましい発展が引き起こす貨幣資本の運動の変化、金融化の影響が現実資本の競争と蓄積様式に及ぼしている大きな影響を、事実に即して具体的に分析する作業が立ち遅れてきた。このため、現代の恐慌の特異性を、独占資本主義論を手直しすることで抽象的に説明する傾向、さらには、利潤率の傾向的低下論を応用することで説明する傾向が根強く残されている。

(7)報告者の理解では、現代資本主義の蓄積様式の歴史的特徴を立ち入って分析するためには、仕組み証券（証券化）市場やデリバティブ市場を含む（架空）資本市場の最新の状況、巨大・多角化・多国籍化した大手金融機関の活動の実態、さまざまな機関投資家と富裕層の手元に蓄積される膨大な貨幣資本（金融資産）の運動、産業資本や商業資本の財務構造と財務活動の変容などについて、正確かつ立ち入った知識が要求される。マルクス経済学は、これらの問題の解明において、ポストケインジアンを始めとする他の非主流派経済学に比べて、必ずしも先進的・積極的な貢献をしてきたということはできない。むしろ、マルクスの信用・恐慌に関する記述への過度の依存と、現代金融システムの複雑な様相を具体的に解明する作業の不足、これらと関連して生じているマルクス経済学内部における見解の著しい不一致から、現代資本主義と恐慌の分析で立ち遅れる結果を招いている。金融化論を含む近年の現代資本主義研究の豊富な成果を、信用論・恐慌論、ひいては現代資本主義論の今後の発展に生かすためにも、マルクス信用・恐慌論のさらなる発展が必要になっている。

(8)マルクス経済学が今後取り組むべき重要な課題の一つに、この間の Too Big To Fail 問題をめぐる議論を総括し、金融システムの公的管理（規制監督を超えて）をめざす議論を発展させる必要がある。